

# 現代言語学における術語の揺れについて ——langue、langage、parole を基に——

松 中 完 二

## 0. はじめに

現代言語学は、その形成と発展の多くを 1916 年に刊行された Saussure の代表的書である *Cours de linguistique générale* (以下、CLG で表す) とそこで展開された学説に負っている。Saussure が現代言語学の父と称され、彼の学説によって現代言語学が様々な分野にまで裾野を広げ大きな発展を遂げてきたことに、異を唱える者はいない。そして Saussure の学説における中心的主張が、langue、langage、parole という三分法である。しかし langue、langage、parole の三分法と、その訳語には統一が見られず、言語現象を表す西洋諸語における術語と概念が、日本語のそれにおいて対応を見せにくいという問題をはらんでいる。こうした術語の揺れという問題は、この三分法が現代言語学の中枢をなす考え方であるだけに、小さな問題として決して看過すべきものではない。

本稿では、langue、langage、parole という三分法とそれに対する日本語の術語の揺れについて、松中 (2018<sup>b</sup>)<sup>1)</sup> で明らかにした論考をさらに進めて考察する。

## 1. Saussure 言語学における langue、langage、parole

Saussure 学説の一番の特徴として、言語をその性質に応じて langue、langage、parole に分けた三分法があげられる。このことは、次のように記述されている。

Mais qu'est-ce que la langue? Pour nous elle ne se confond pas avec le langage; elle n'en est qu'une partie déterminée, essentielle, il est vrai. C'est à la fois un produit social de la faculté du langage et un ensemble de conventions nécessaires, adoptées par le corps social pour permettre l'exercice de cette faculté chez les individus. Pris dans son tout, le langage est multiforme et hétéroclite; à cheval sur plusieurs domaines, à la fois physique, physiologique, et psychique, il appartient encore au domaine individuel et au domaine social; il ne se laisse classer dans aucune catégorie des faits humains, parce qu'on ne sait comment dégager son unité.

La langue, au contraire, est un tout en soi et un principe de classification. Dès que nous lui donnons la première place parmi les faits de langage, nous introduisons un ordre naturel dans un ensemble qui ne se prête à aucune autre classification. (中略) la langue est une

convention, et la nature du signe dont on est convenu est indifférente.<sup>2)</sup>

所で、言語とは何か。余に従えば、それは言語 *langue* と言語活動 *langage* とは別物である。言語は決定された部分であり、本質的な部分である。言語活動能力の社会的所産であり、同時にその能力の行使を個人に許すべく社会団体が採用したる必要なる制約の総体である。言語活動は、全体として観ると、多様であり混質である。物理、生理、心理と、各方面に跨り、個人の領分へも足を突込んでいる。従って人類所産の如何なる部類へも分類する事が出来ない。その単位を引出すべき術を我々は知らぬからである。

言語は之に反して其れ自身一体である。故に分類原理となる。言語活動事実の中で言語を第一位に置きさえすれば、此の、他の如何なる分類にも任されぬ全一体なるものに、本来の世界を与える事を得るのである。(中略) 言語が制約であり、人間が好しと定めた記号が甲であれ乙であれ問う必要がない、という事は正しい。<sup>3)</sup>

La partie psychique n'est pas non plus tout entière en jeu: le côté exécutif reste hors de cause, car l'exécution n'est jamais faite par la masse; elle est toujours individuelle, et l'individu en est toujours le maître; nous l'appellerons la *parole*.<sup>4)</sup>

精神的な部分にしてもその全部が働いて居るものではない。遂行的方面は原因に成れぬ。遂行は群衆に依つて行はれることは絶対にないからだ。遂行は常に個人的であり、個人は常に遂行の主である。我々はそれを言 *parole* と呼ぶ。<sup>5)</sup>

Si nous pouvions embrasser la somme des images verbales emmagasinées chez tous les individus, nous toucherions le lien social qui constitue la langue. C'est un trésor déposé par la pratique de la parole dans les sujets appartenant à une même communauté, un système grammatical existant virtuellement dans chaque cerveau, ou plus exactement dans les cerveaux d'un ensemble d'individus; car la langue n'est complète dans aucun, elle n'existe parfaitement que dans la masse.

En séparant la langue de la parole, on sépare du même coup: 1. ce qui est social de ce qui est individuel; 2. ce qui est essentiel de ce qui est accessoire et plus ou moins accidentel.<sup>6)</sup>

若し凡ての個人の頭の中に貯蔵された言語映像の総和を把握する事が出来たならば、言語を構成する社会的連鎖に触れるであろう。言語は言わば、言の運用に依つて、同一団体に属する言主の頭の中に溜込まれたる貯金であり、各人の脳裡に、いな正確に言えば個人の総和の脳裡に、隠然と力を振う文法体系である。何となれば言語は個人にあつて完成せず、群集にあつて始めて完全に存在するからである。

言語を言から切り離す事に依つて、同時に、(一) 社会的なるものと個人的なるもの、(二) 本質的なものと随伴的にして多少とも偶有的なるもの、とが分離される。<sup>7)</sup>

La langue, distincte de la parole, est un objet qu'on peut étudier séparément.<sup>8)</sup>

言語は言とは違つて、切り離して研究し得る対象である。<sup>9)</sup>

そして *langue* を言語学の研究対象とした点については、次の様に述べられている。

*il faut se placer de prime abord sur le terrain de la langue et la prendre pour norme de toutes les autres manifestations du langage.* [斜体部原文ママ]<sup>10)</sup>

何を差置いても先ず第一に言語なる土地の上に腰を据え、言語を以て言語活動の他の凡ゆる示現の規範と為す事である。[傍点部原文ママ]<sup>11)</sup>

(前略) la tâche du linguiste est de définir ce qui fait de la langue un système spécial dans l'ensemble des faits sémiologiques.<sup>12)</sup>

言語学者の務めは、言語をして記号学的事実フェ・セミロジックの総体の中に特殊な体系を成さしめる所のものを確定するにある。<sup>13)</sup>

*La linguistique a pour unique et véritable objet la langue envisagée en elle-même et pour elle-même.*

[斜体部原文ママ]<sup>14)</sup>

言語学の独自且つ真正の対象は、直視せる言語であり、言語の為の言語である。[傍点部原文ママ]<sup>15)</sup>

この *langue*、*parole* という二つの枠組みは、その後の言語研究の基本的姿勢となり、アメリカ構造主義言語学においても Bloomfield、Chomsky らによって形を変えて受け継がれていく。ソシユールの学説における中心的主張が、*langue*、*langage*、*parole* という三分法であることについては、異論の余地はあるまい。しかし問題は、*langue* の性質とその日本語訳である。小林英夫訳による *CLG* の日本語訳である『一般言語学講義』における *langue*、*langage*、*parole* に当てられた日本語訳を見る限りにおいて、それが言語学の世界の内外で定着しているとは思われず、またそれ以上に、*CLG* 以降に上梓されたフランス語の主たる言語学や哲学関連の書物における *langue*、*langage*、*parole* の日本語訳を見ると、その訳語自体になら統一性は見出されない。特にこの三分法が、日本語において一応の術語上の対応を見せることで、言語学という学問の構築を果たしているだけに、言語学そのものがこうした術語の上に成り立っていながら、それ故に脆弱な基盤に揺れている学問であるという見方さえ出来るのである。このことについて、Godzich (1974) は次のようにその問題点を批判している。

C'est ainsi que depuis lors le développement de la linguistique a consisté en de vaines

tentatives de définitions de concepts variés dont l'unique dénominateur commun a été leur résistance à l'acte de définition, de sorte qu'on a pu récemment écrire (Kramsky, 1969) que la linguistique est cette science qui est aux prises avec ses définitions. Il suffit, en effet, de considérer l'abondance et la diversité des définitions proposées pour le phonème, la syllabe, et, plus récemment, la phrase, pour comprendre 《qu'on est pessimiste quant à la possibilité de définir quoi que ce soit en linguistique》<sup>16)</sup>

このように、言語学はその発展期からずっと、諸概念の定義をいたずらに試みるだけのものではなかった。これまで色々行われてきたこれらの虚しい試みに見られる唯一の共通点は、定義を試みられた諸概念が、実際には定義という行為に逆らうものだということである。それゆえ Kramsky (1969) では、言語学は自らの行う定義の罫にはまってしまった学問である、とまで書かれているのである。実際、音素とか音節について、あるいはもっと最近なら文について、これまでいかに多くの異なる定義が試みられてきたかを少し考えてみさえすれば、「言語学に属するものを何か一つでも定義出来る可能性については、悲観的にならざるを得ない」(Kramsky の同書より)ということが納得される。(松中訳)

Godzich のこの指摘は、言語学の抱えている根本的問題を指摘すると同時に、言語学における術語解釈の問題を我々に投げかけるものである。Bernstein (1971: 230)<sup>17)</sup> もその性質を指して、「言語学が泥沼に陥り、自身はそうした泥沼に足を踏み入れる意志はない」と明言し、Black (1969: 35)<sup>18)</sup> は、「このように広く関心を集めている問題でありながら、現状のようにつかみどころのないまま問題が放置されているのは不思議なことである」(松中訳) と言語学のあり方自体に警鐘を鳴らす。

Saussure の学説が現代言語学のみならず、現代思想や哲学にまで波及するのは、langue の存在ゆえである。langue、langage、parole という三分法は、小林英夫による『言語学原論』(1928)において、それぞれ「言語」、「言語活動」、「言」と訳され、言語学は言語、すなわち langue を研究対象とする学問であるという認識を与えることとなる。しかし、フランスで Lévi-Strauss が出現し、構造主義的な記号論研究の台頭により、欧米の言語学者が研究対象とする言語とは langue ではなく langage であるということが判明してから、事態は一変する。それまで langue、langage という概念とそれに当てられた訳語が一致しないものとなり、langue の訳語として「言語」では不備が生じることに気付かされる結果をもたらした。

次章では、そうした訳語の対応の問題とそれに伴って生じる概念の認識、更には英語との対応関係による西欧諸語との対応関係について考察をすすめる。

## 2. 訳語の問題

### 2.1. *langue*、*langage*、*parole* の訳語

Saussure の学説は、わが国では小林英夫訳を基にして紹介された。そしてそこでは、*langue* に「言語」という訳語が当てられた。Hawkes (1977) は、この訳語の対応を英語との関係で以下のように指摘している。

The distinction between *langue* and *parole* is more or less that which pertains between the abstract language-system which in English we call simply ‘language’, and the individual utterances made by speakers of the language in concrete everyday situations which we call ‘speech’.<sup>19)</sup>

ランゲとパロールの区別は大体において、一方は英語では単に *language* と呼んでいる抽象的な言語体系に対応し、他方はその言語の話者が日々の具体的な状況において発する個々の発話で、英語では *speech* と呼ぶものとの区別に等しい。<sup>20)</sup>

また Buissac (2010)<sup>21)</sup> も同様の指摘を繰り返す。曰く、フランス語の *langage* は英語の *language* と同様の意味範疇をカバーすることを指摘し、こうした複数の *langue* を同音異義とまで言い切っている。Saussure の草稿に見られるフランス語の *langue* は具体的本質体としての「言語」と人間の持つ能力を指す抽象的本質体としての「言語（能力）」、そしてある特定の世界中の諸言語を指す場合とが混在している。言語学の研究対象として扱われてきた *langue* の意味がどれであるかは、今や明らかである。そもそも Saussure が *langue*、*langage*、*parole* という三分法を得たのは、丸山圭三郎 (1983)<sup>22)</sup> も言うように、彼の母国語がフランス語であったことと、フランス語には日常的にこの三つの分類が存在しているからである。フランス語では *langue*、*langage*、*parole* という三分法は極めて自然な分割法なのである。

では *langue* と *parole* の関係はどういうものか。Saussure 学説における第一の分岐点は *langage* を *langue* と *parole* に分けたことである。そしてこれまでは、言語学の目的で本質は *langue* の研究であると捉えられてきたが、実際はそうではないことが今や明らかである。Hawkes (1977) は *langue* と *parole* の関係について、次のように説明する。

The nature of the *langue* lies beyond, and determines, the nature of each manifestation of *parole*, yet it has no concrete existence of its own, except in the piecemeal manifestations that speech affords. (中略) *Langue* is therefore ‘both a social product of the faculty of speech and a collection of necessary conventions the have been adopted by a social body to permit individuals to exercise that faculty’ (p. 9). *Parole*, it follows, is that small part of the iceberg that appears above the water. *Langue* is the larger mass that support it, and is implied by it, both in speaker and hearer, but which never itself appears.<sup>23)</sup>

(前略) ラングの特質は個々の場合のパロールという具現の特質を越えて存在し、またその具現を決定するが、それ自体としては発話に現れる断片的な具現以外に具体的な形で存在することはないのである。(中略) したがってラングとは、「言語能力の社会的所産であり、かつ個人がその能力を用いることを可能にするように社会の大勢によって採用された必要な規則の集合」(九頁)なのである。だから、パロールは海面上に浮かぶ氷山の一角であり、ラングはそれを支え、そして更に話し手も聞き手も共に当然持っていると考えられるより大きな氷山の塊である。しかし、ラング自体は決して姿を現わさない。<sup>24)</sup>

その langage であるが、言語の能力を指すこともあれば言語の活動を指すこともあり、そこには話し言葉、書き言葉、身ぶり手ぶり、象徴行為などありとあらゆる言語に伴う諸行為と諸活動が含まれる。言語に伴う一般かつ全般の行為が langage であり、それは「言語活動」そのままである。一方 parole は、あらゆる言語に存在する人間の活動の一つである眼前の言語現象を対象とし、そこでの現象のみを論じればいいのであるから、特にこうした問題が起こらないのうなずける。小林訳の「言」という訳語は違和感を覚えるものではあるものの、parole の思想内容自体はさほど問題はない。フランス語の parole は日常的にもよく使用される言葉で、個々人による現実の「発話」といった意味合いを持つ。また parole は langage を支える個々人のその都度の発話行為を指すのであるから、「発話」という訳語で問題ないように思われる。そうであれば、英語では langage は language で、parole は utterance や speech で問題なく対応する。日本語であれば、langage は「言語活動」で、parole は「発話」で問題なく対応しそうである。そうすると残る問題は langue である。これに対応する英語は何なのだろうか。この問題については次節で考察する。

## 2.2. 訳語の対応関係

ここで、構造主義の主要な書籍における langue、langage、parole フランス語と日本語、フランス語と英語の訳語の対応について見ていく。松中 (2018<sup>b</sup>: 368-369)<sup>25)</sup>において、構造主義の主要な著書に見られた langue、langage、parole の日本語訳と英語訳の対応の揺れを明らかにした。ここではその結果を基に見ていく。

表 1：フランス語と日本語の訳語対応関係

フランス語	日本語訳
langue	「言語」(小林英夫訳) <sup>26)</sup> 「言語」(荒川幾男他訳) <sup>27)</sup> 「言語」(山本富啓訳) <sup>28)</sup> 「 <sup>ラング</sup> 言語体」、「言語体」(渡辺淳訳) <sup>29)</sup> 「ラング」、「 <sup>ラング</sup> 言語」(沢村昂一訳) <sup>30)</sup>

	<p>「言語体系」(福井芳男他訳)<sup>31)</sup>  「言語」(斎藤兆史訳)<sup>32)</sup>  「言語体系」、「言語体系」(中村雄二郎訳)<sup>33)</sup>  「言語」(渡辺一民・佐々木明訳)<sup>34)</sup>  「ラング」、「言語」、「言語体系」、「個別言語」(青柳悦子訳)<sup>35)</sup>  「言語」(相原奈津江・秋津伶訳)<sup>36)</sup>  「言語」、「個別言語」、「ラング」(松澤和宏訳)<sup>37)</sup></p>
langage	<p>「言語活動」(小林英夫訳)<sup>38)</sup>  「言語」(荒川幾男他訳)<sup>39)</sup>  「言語」(山本富啓訳)<sup>40)</sup>  「言語」、「言語」(渡辺淳訳)<sup>41)</sup>  「言語活動」、「言語活動」(沢村昂一訳)<sup>42)</sup>  「言語活動」、「言語」(福井芳男他訳)<sup>43)</sup>  「言語」(斎藤兆史訳)<sup>44)</sup>  「言語」(中村雄二郎訳)<sup>45)</sup>  「言語」(渡辺一民・佐々木明訳)<sup>46)</sup>  「言語活動」、「言語活動」、「言語現象」、「言葉」(青柳悦子訳)<sup>47)</sup>  「言葉」(相原奈津江・秋津伶訳)<sup>48)</sup>  「言語」、「言葉」、「ランガージュ」(松澤和宏訳)<sup>49)</sup></p>
parole	<p>「言」(小林英夫訳)<sup>50)</sup>  「言葉」(荒川幾男他訳)<sup>51)</sup>  「発言」(山本富啓訳)<sup>52)</sup>  「コトバ」、「コトバ」(渡辺淳訳)<sup>53)</sup>  「パロール」、「言」(沢村昂一訳)<sup>54)</sup>  「言」(福井芳男他訳)<sup>55)</sup>  「言」(斎藤兆史訳)<sup>56)</sup>  「パロール」、「音声言語」、「言葉」(中村雄二郎訳)<sup>57)</sup>  「話されたもの」、「言葉」(渡辺一民・佐々木明訳)<sup>58)</sup>  「パロール」、「発言」、「言葉」、「言語実践」、「せりふ」(青柳悦子訳)<sup>59)</sup>  「言葉」(相原奈津江・秋津伶訳)<sup>60)</sup>  「言葉」、「パロール」(松澤和宏訳)<sup>61)</sup></p>

表2：フランス語と英語の訳語対応関係

フランス語	英語訳
langue	<p>language (Wade Baskin 訳)<sup>62)</sup>  language (Claire Jacobson and Brooke Schoepf 訳)<sup>63)</sup>  language (Annette Lavers &amp; Colin Smith 訳)<sup>64)</sup>  language (Thomas Sebeok 訳)<sup>65)</sup>  language、language (langue) (Sheridan Smith 訳)<sup>66)</sup>  language (Tavistock Publications Limited 訳)<sup>67)</sup></p>

	<i>Langue</i> , language (Sanders, C. & Pires, M. 訳) <sup>68)</sup>
language	speech (Wade Baskin 訳) <sup>69)</sup> language (Claire Jacobson and Brooke Schoepf 訳) <sup>70)</sup> language (Annette Lavers & Colin Smith 訳) <sup>71)</sup> language (Thomas Sebeok 訳) <sup>72)</sup> language (language) (Sheridan Smith 訳) <sup>73)</sup> language (Tavistock Publications Limited 訳) <sup>74)</sup> <i>langage</i> , language (Sanders, C. & Pires, M. 訳) <sup>75)</sup>
parole	parole, speaking (Wade Baskin 訳) <sup>76)</sup> language (Claire Jacobson and Brooke Schoepf 訳) <sup>77)</sup> speech (Annette Lavers & Colin Smith 訳) <sup>78)</sup> 訳語なし (Thomas Sebeok 訳) <sup>79)</sup> speech (Sheridan Smith 訳) <sup>80)</sup> word, speech, spoken word (Tavistock Publications Limited 訳) <sup>81)</sup> <i>parole</i> (Sanders, C. & Pires, M. 訳) <sup>82)</sup>

ここで気付かされることは、日本語訳の混在と統一性のなさだけでなく、その訳語だけに頼ってはいは Saussure の思想の一端にも触れることが不可能であり、内容理解の前に術語解釈の段階で大きな試練と障壁の現実を突きつけられることである。次にフランス語とその英訳についてであるが、CLG の Wade Baskin 訳以外は *langue* と *langage* のどちらも *language* であることに気付く。Lévi-Strauss が出現し、構造主義的な記号論研究が脚光を浴びるようになり、欧米の言語学者が研究対象とする言語とは *langue* ではなく *langage* であるということが判明してから、それまで *langue*, *langage* という概念とそれに当てられた訳語が一致しないものとなり、*langue* の訳語として「言語」だけでは不備が生じるようになった現象がこの対応図からも明らかである。事実、Lévi-Strauss の *Anthropologie structurale* の英訳である *STRUCTURAL ANTHROPOLOGY* にいたっては、フランス語の *langue*, *langage*, *parole* が全て *language* と訳されている。更にそれに追い討ちをかけるのが、Foucault の *Les Mots et Les Choses* とその邦訳である。同訳書においては、*langue* と *langage* に同じ「言語」という訳語を当て、「言語」、「言語」とルビを振り分けることで、その違いを表そうとしている。更に困ったことには、*langue* という概念を表す際にも、「言語」、「諸言語」と全く異なると思われる現象に対して同一の訳語を当てていることである。このことは、Saussure の自筆原稿としての CLG の翻訳である相原・秋津訳 (2003)<sup>83)</sup> においても基本的に変化は見られない。そこでは *langage* と *parole* を同じ「言葉」と訳し、言語、言葉、言葉と、それぞれにルビを振り分けることで区別するものの、今度は言葉という術語が二重になって現れてくる。これでは Foucault の「言語」という訳語の問題と何も変わらない。結局、*langue* の訳語は「ラング」でしかありえない現実が浮き彫りになる。

そもそも日本語には *langue* に対応する言葉も区別も存在しないのである。そしてそれは



そのまま、本稿の 1. に見た Godzich (1974)<sup>84</sup> や Black (1969)<sup>85</sup> らによる、言語学の姿勢に対する批判へとつながるものである。

### 3. *langue* の本質

日本語で *langue* に当たる言葉も概念もないのは、フランス語の語彙の特質によるところが大きいと考えられる。この点については、磯谷孝 (1980) の次の指摘が的を射ている。

Saussure 言語学における、ラング、パロール、ランガージュの三分法が、フランス語の言語構造そのものに負っていることはすでに述べたが、マウロの指摘は、ラングの概念そのものが、多分にフランス語そのもの（というよりも、ひょっとしたら、冠詞と、数という文法的カテゴリーをもつインド・ヨーロッパ語そのものの）構造に負っていることを明らかにする。言語 *langue* は、フランス語では...*langue*、*une langue*、*la langue*、*les langues*、*langues* 等の現れ方をする。このうち、*la langue* は、一方では「この、その言語」、を表わすと同時に、「そもそも言語というもの」といった絶対普遍概念を表わすことができる。つまり、冠詞と数の使い分けによって、任意の単語が普遍概念、個別概念、特称概念を表わしたりすることができるのである。<sup>86</sup>

そうであるならば、われわれは今一度 *langue* の正しい解釈を試みるべきであろう。次の節では *langue* の本質に迫ってみたい。

#### 3.1. 諸言語としての *les langues*

事実、磯谷が指摘する通り、Saussure における *langue* の概念は、次の三つに分けられる。

一つ目は *les langues* と複数形で用いられる場合である。それは以下の例に見られるように、現存する諸言語の中の、対象となる複数個の言語を指す。この点の邦訳については、小林英夫訳『一般言語学講義』（岩波書店、1972 年）が分かりやすいため、そちらを用いる。

*Les langues sémitiques expriment le rapport de substantif déterminant à substantif déterminé*  
(後略) [斜体部筆者]<sup>87</sup>

セミト諸語は定辞実体詞と被定辞実体詞との関係を、(中略) たんなる並置によって表わす、(後略) [下線部筆者]<sup>88</sup>

Quand on compare *les langues* sémantiques avec le protosémitite reconstitué, on est frappé à première vue de la persistance de certains caractères; (後略) [斜体部筆者]<sup>89</sup>

セミト諸語と再建されたセミト原語とを比較したとき、ひとは一見してある種の特質の永続に眼を見張った；(後略) [下線部筆者]<sup>90</sup>

### 3.2. 言語体系としての *la langue*

二つ目は *la langue* と単数形で用いられる場合である。これは *les langues* から帰納される言語の原理的体系を指している。例えば、以下の記述がそうである。

*La langue, distincte de la parole, est un objet qu'on peut étudier séparément. (中略) C'est au psychologue à déterminer la place exacte de la sémiologie; la tâche du linguiste est de ce qui fait de la langue un système spécial dans l'ensemble des faits sémiologiques. [斜体部筆者]<sup>91)</sup>*

言語は、言とはことなり、切りはなして研究しうる対象である。(中略) 記号学の精密な位置を決定するのは心理学者の仕事である；言語学者のつとめは、言語をして記号学的事実の総体のうちで特殊の体系たらしめるものを、定義するにある。[下線部筆者]<sup>92)</sup>

*La langue, au contraire, est un tout en soi et un principe de classification. [斜体部筆者]<sup>93)</sup>*  
これに反して、言語はそれじしん全一体であり、分類原理である。[下線部筆者]<sup>94)</sup>

(前略) *la langue n'est pas une institution sociale en tous points semblables aux autres (中略) la langue est une convention, et la nature du signe dont on est convenu est indifférente. [斜体部筆者]<sup>95)</sup>*

言語は一つの制約であり、人びとのとりきめた記号の性質のいかんは、問う必要がない。[下線部筆者]<sup>96)</sup>

### 3.3. 社会的総体としての *la langue*

そして三つ目は、同じく *la langue* と単数形で用いられる場合であるが、これは最初に見た特定の国語体を指すものでも、二番目に見た一つの国語体の総体化でもなく、社会や文化総体を一つの体系として捉える人間的認識として用いられる概念である。そしてここでの *langue* という概念の解釈は、丸山圭三郎 (1971) の、

まずラングとは抽象であり、体系そのものである。体系はそれ自体で充足し、その固有の価値は、体系自身によってのみ決定される。ここでは、ラングとは一つの国語体を指すのではなく、言語のすべてのレベルについて語ることができる。(中略) ラングとは、従って一つのコードである。私たちは、このコードによってさまざまな生体験を分析し、発話の瞬間に必要な選択が可能になる。このコードを持つために、非言語的現実を言語に分節し、連続的世界を不連続の次元に止揚し、知覚されたものを認識の次元に高めることができるのである。(中略) ラングとはまた一つの《形態》であって、<sup>シュプスタンス</sup>《物質的実体》ではない。<sup>97)</sup>

という解説につながっていく。また、その問題は日本語の翻訳によるところも少なくない。この点について、末永朱胤 (2018) は次のように指摘している。

CLG の邦訳の問題はわれわれをして二つの距離の前に導いた。一つは、CLG とその読者との間の距離であり、もう一つは、CLG とその翻訳との間に開けている距離である。この二つの距離は、次に、解釈の問題の入り組んだ複合体をなし、これに取り組む我々は、問題の錯綜があたかも一本の通路であったかのように端なくも導かれ、こう言っていれば、第三の距離の前に自らを見出すこととなったのだ。最も本質的な距離、CLG と手稿原資料のそれである。ソシュールの声を聞いて書き取られた思想と、その書き付けを基にして編まれた死後出版の書物、ソシュールの名を二十世紀思想の代表的な記号のひとつとすることになった書物との間の不思議な距離である。<sup>98)</sup>

Saussure の学説と、そこでの術語の翻訳の問題については松中 (2018<sup>a)</sup><sup>99)</sup> でも詳細に考察しているので、そちらを参照されたい。

#### 4. まとめ

フランス語における *langue*、*langage*、*parole* という三分法と、その訳語と概念認識の対応に対して、磯谷孝は次のように述べている。

ラング、パロール、ランゲージュの三分法は、先に述べたように、小林氏によって、それぞれ言語、言、言語活動と訳され、この訳語は一応定着した。このうち、一番おさまりのよいのはラング = 言語であり、パロールとなると少々厄介で、言ではなんとなく馴染みがないので、発話にしたり、言葉にしたり、ことば、コトバ、ことば、ことばなど色々工夫がなされた。(中略) 欧米語にはどうやらラング、パロールの二分法に対応するものがあって、たとえば英語では *language* と *speech* (実際、A. ガーディナーがその区分を用いている)、ドイツ語では *Sprache* と *Rede*、ロシア語ではヤズィクとレーチがそれに当たる。(中略) ところが、フランスでレヴィ = ストロースが出現し、構造主義的な記号論研究が起こってから事態が変わった。彼らが研究対象とする言語とはラングではなくてランゲージュだったのである。それ以後ラング = 言語だけでは用が足りなくなってしまう。訳書には言語、言語体、言語体系などが登場するようになる。(中略) ソシュールのラング、ランゲージュ、パロールという三分法は、全くフランス語の自然な発想であり、この発想にもとづいてソシュールはなにはさておいてもラングを研究対象とする言語学を建設しようとした。それを足場にして、戦後、フランス人たちは現実と言語のかかわりあいの産物ともいべきランゲージュの構造を解きほぐそうとしたのである。(中略) ラングはいわば文法規則のようなもので、現実の質を反映しにく

いが、ランゲージュはラングが現実において使用されたものであり（逆に、ラングがランゲージュの抽象というほうが正しいのかもしれないが）、現実と相関し、現実の質を反映する。そこで現実を分析しようとするときには、現実そのものは混沌としたものであるから、現実についての言語であるランゲージュを取りあげ、これをラングの研究で得られた諸原理、諸方法をもちいて分析すればよいということになるのである。（中略）英語では、*language* と *speech* という便利な語があり、（中略）これは、一応、ソシユール言語学のラング、パロールに対応している。これら二つの対応が成り立つことによってランゲージュは追い出されてしまったわけである。（中略）他方、マウロも指摘しているとおり、マルティネの言語学辞典（大修館）の術語索引では、*language*（英）には主に *langue*、そして *language* が当てられており、*speech* には、*discours*、*parler* そして *parole* が当てられている。（中略）つまり、*speech* がパロールとランゲージュ、*language* がラングとランゲージュにあたるという二つの解釈がここに存在するのである。<sup>100)</sup>

このことから、*langue* と *language* は英語の *language* に相当し、*parole* は英語の *speech* に相当すると考えられ、日英語共に *langue* の不在が浮き彫りとなる。一方、*langue* 概念と Saussure がそこに到達した経緯について、松澤和宏 (2007) は次のように主張する。

しかし人間の自然的能力としてのランゲージュ *langage*（言語能力）の研究と諸言語 *les langues* の研究との関係が問題となるやいなや、あらたな問いかけの場が拓けてくる。ソシユールは二つの研究が相互に補い合って豊かなものになると強調しているように一見すると思えるのだが、注意深く読むならば、諸言語の研究がランゲージュの一般的研究よりも優先されるべきだと説いていることが判明する。（中略）ソシユールはランゲージュと諸言語との狭間で、「言語能力」のように人類にとって普遍的でありながら、同時に「諸言語」のように具体的な事実でもあるものとして、すなわち具体的普遍性 *universalité concrete* の地平でラング (*la langue* 言語) という概念を練り上げていくのである。ソシユールは弟子の手による『一般言語学講義』のように、ラング概念は断定的に課せられるのではなく、具体的普遍性の地平で時間軸における間断なき言葉の伝承において姿を顕してくる。通説に反して、ラング概念は共時論的な展望において現れてくるのではなく、時空間にわたる言葉の伝承の次元で登場してくる。ソシユールは「或る言語」*une langue*、「諸言語」*les langues*、「言語活動」*langage*、そして「言語ラング」*la langue* の間で逡巡したあげく、ラング概念に到達している。<sup>101)</sup>

ブーイサック (2012: 138) も同様に、次のように語っている。

(前略) ソシュールはフランス語のありふれた単語ラングを再定義して、理論的、いや、少なくとも試行錯誤的意味合いを与えた。ソシュールはラングという概念に明確な意味を与え、複数形であれ単数形であれ、その後が示しうるそれ以外の意味合いを排除した。ソシュールの再定義においては、単数形のラングは普遍的なるものを指す。過去、現在、未来のすべての言語の土台だ。他のすべての使用的側面をそぎ落とした、純粋なシステムとしての言語である。これこそ、ソシュールが、科学的研究の基礎となりうるシステムだと考えたものだった。<sup>102)</sup>

Saussure が言語研究の対象とし、またそしてわれわれが問題とし、これまで議論されてきたのは、まさにこの抽象的本質体としての *langue* に他ならない。末永 (2018) はこうした問題に対して、以下のようにまとめる。

「言語活動」の原語は仏語 *langage* である。*langage* は意味の広い語で、仏和辞典では「言語機能」「言語」「言葉」などと訳される。小林英夫は「言語活動」と訳している。CLG の問題のくだりの直前には「ところで、言語 [*langue*] とは何であるか。われわれに従へば、それは言語活動 [*langage*] とは別物である；それは後者の一部分にすぎない」(小林訳)とあり、言語と言語活動を区別し、言語は言語活動の一部であるとしている。また、見たように、言語活動は「同時に物理的、生理的、かつ心的で」あるのだから、発音という空気の振動としての言語現象(物理的領域)から、発声器官や聴覚器官の働きとしての言語現象(生理的領域)、そして話し手や聞き手の意識の領域での言語現象(心的領域)までを含んでいる。つまり、小林が「言語活動」と訳した *langage* (ランガージュ)とは言語現象一般を指す最も広義の語である。これに対し「言語」は *langue* (ラング)の訳だが、「日本語」「英語」「フランス語」などの「国語」「特定言語」「固有言語」にあたる。固有の発音、語彙、文法を備えた言語体系であり、言語現象(ランガージュ)に含まれる一部である(言語(ラング)はランガージュの心的領域に含まれる)。<sup>103)</sup>

Mounin (1968: 38)<sup>104)</sup>も指摘しているように、そもそも西欧諸語には、ラテン語における“*lingua* (言語)”と“*sermo* (話し言葉)”、ドイツ語における“*Sprache* (言語)”と“*Rede* (言葉)”、そしてフランス語における“*langue* (言語)”と“*parole* (発話)”というように、こうした言語現象を表す二項対立の言葉が存在し、それに基づいた考え方であると見ることができる。その上で、おそらくは Hermann Paul や von der Gabelentz に見出される“*Sprachusus* (言語慣習)”と“*individuelle Sprachtätigkeit* (個人的言語活動)”との対立、Humboldt における“*ergon* (作品)”と“*energeia* (活動)”の対立と類似の概念であろうことはこれまでもたびたび議論の対象とされてきたし、またそうした考え自体を少なくとも直接の先駆者で

ある Whitney に依っていることは明らかである。しかし Saussure 自身はこれら先人の考えが自身の思想にどのように影響を及ぼしているかについては何も触れようとはしない。ただ最も重要な事実は、Godel (1957: 144)<sup>105)</sup> が指摘するように、“langue” と “parole” の対立は、単に“言語慣習”と“個人的言語活動”との対立に見られるような単純な図式で割り切れない、もっと複雑な内容を持っているということである。こうした点について Engler (1968: 865)<sup>106)</sup> の指摘は Saussure の “langue” と “parole” の概念とそこでの思想を捉えているが、それを基にしても言語研究家が研究の対象とするのは、潜在にある精神的宝庫としての “langue” なのである。

## 註

- 1) 松中完二『ソシユール言語学の意味論的再検討』ひつじ書房、2018<sup>b</sup>年。
- 2) Saussure, F. de. *Cours de Linguistique Générale*, (Paris: Payot. 1916), 25–26.
- 3) ソシユール, フェルヂナン・ド、小林英夫訳『言語学原論』岡書院、1928年、21–23頁。
- 4) Saussure, F. de. *op.cit.* 30.
- 5) ソシユール, フェルヂナン・ド、小林英夫訳、前掲書、29頁。
- 6) Saussure, F. de. *op.cit.* 30.
- 7) ソシユール, フェルヂナン・ド、小林英夫訳、前掲書、29–30頁。
- 8) Saussure, F. de. *op.cit.* 31.
- 9) ソシユール, フェルヂナン・ド、小林英夫訳、前掲書、32頁。
- 10) Saussure, F. de. *op.cit.* 25.
- 11) ソシユール, フェルヂナン・ド、小林英夫訳、前掲書、21頁。
- 12) Saussure, F. de. *op.cit.* 33.
- 13) ソシユール, フェルヂナン・ド、小林英夫訳、前掲書、35頁。
- 14) Saussure, F. de. *op.cit.* 317.
- 15) ソシユール, フェルヂナン・ド、小林英夫訳、前掲書、478頁。
- 16) Godzich, W. Nom propre: langage/texte. In *Recherches: sémiotexte les deux saussure 16*. (Paris: Centre d'Etudes, 1974), 43.
- 17) Bernstein, B.B. Language and Socialization. In Minnis, N. ed. *Linguistics at Large*. (London: Ebenezer Balys & Son Limited. 1971.), 227–245. (長井善見訳「言語と社会化」中島文雄監訳『概説言語学』三省堂、1973年。295–321)
- 18) Black, M. Some troubles with Whorfianism. In Hook, S. ed. 1969. *Language and Philosophy*. (New York University Press, University of London Press. 1969.), 30–35.
- 19) Hawkes, T. *Structuralism and Semiotics*. (Berkeley: University of California. 1977.), 20.
- 20) ホークス, テレンス、池上嘉彦他訳『構造主義と記号論』紀伊国屋書店、1979年、29頁。
- 21) Bouissac, P. *Saussure: a guide for the perplexed*. (London: Continuum. 2010.)
- 22) 丸山圭三郎『ソシユールを読む』岩波書店、1983年、112–113頁。
- 23) Hawkes, T. *Structuralism and Semiotics*. (Berkeley: University of California. 1977.), 21.
- 24) ホークス, テレンス、前掲書、29–30頁。
- 25) 松中、前掲書、2018<sup>b</sup>年。

- 26) ソシュール, フェルヂナン・ド、前掲書。
- 27) レヴィ＝ストロース, クロード、荒川幾男・生松敬三・川田順造・佐々木明・田島節夫共訳『構  
造人類学』みすず書房、1972年。
- 28) ヤーコブソン, ローマン、川本茂雄編『ロマンヤコブソン選集3 詩学』大修館書店、1985  
年。
- 29) バルト, ロラン、渡辺淳・沢村昂一訳『零度のエクリチュール』みすず書房、1971年。
- 30) バルト, ロラン、沢村昂一訳『記号学の原理』『零度のエクリチュール』みすず書房、1971年、  
85-206頁。
- 31) リファテール, ミカエル、福井芳男・宮原信・川本皓嗣・今井成美訳『文体論序説』朝日出版  
社、1978年。
- 32) リファテール, ミカエル、斎藤兆史訳『詩の記号論』勁草書房、2000年。
- 33) フーコー, ミシェル、中村雄二郎『知の考古学』河出書房新社、1970年。
- 34) フーコー, ミシェル、渡辺一民・佐々木明訳『言葉と物—人文科学の考古学—』新潮社、1974  
年。
- 35) ヤゲーロ, マリナ、青柳悦子訳『言葉の国のアリス：あなたにもわかる言語学』夏目書房、1997  
年。
- 36) Eisuke, K. *F. de Saussure Troisième cours de Linguistique Générale (1910-1911) d'après les cahiers d'Emile  
Constantin.* (Paris: Pergamon Press. 1993.) 及び小松英輔『ソシュール自筆原稿の研究』(平成6年～  
平成8年度科学研究費補助金基盤研究B(2)研究成果報告書課題番号06451091、1994。)(相原奈  
津江・秋津伶訳『フェルディナン・ド・ソシュール 一般言語学第三回講義(1910-1911) エミール・  
コンスタンタンによる講義記録』エディット・バルク、2003年。) ならびに Eisuke, K. *F. de  
Saussure Deuxième Cours de Linguistique Générale. (1908-1909) d'après les cahiers d'Albert Riedlinger et  
Charles Patois.* (Paris: Pergamon Press. 1997.) (相原奈津江・秋津伶訳『フェルディナン・ド・ソシ  
ュール 一般言語学第二回講義(1908-1909)』エディット・バルク、2006年。)
- 37) ソシュール, フェルヂナン・ド、松澤和宏・校註・訳『フェルディナン・ド・ソシュール「一般  
言語学」著作集I 自筆草稿『言語の科学』』岩波書店、2013年。
- 38) 26) に同じ。
- 39) 27) に同じ。
- 40) 28) に同じ。
- 41) 29) に同じ。
- 42) 30) に同じ。
- 43) 31) に同じ。
- 44) 32) に同じ。
- 45) 33) に同じ。
- 46) 34) に同じ。
- 47) 35) に同じ。
- 48) 36) に同じ。
- 49) 37) に同じ。
- 50) 26)、38) に同じ。
- 51) 27)、39) に同じ。
- 52) 28)、40) に同じ。

- 53) 29)、41) に同じ。
- 54) 30)、42) に同じ。
- 55) 31)、43) に同じ。
- 56) 32)、44) に同じ。
- 57) 33)、45) に同じ。
- 58) 34)、46) に同じ。
- 59) 35)、47) に同じ。
- 60) 36)、48) に同じ。
- 61) 37)、49) に同じ。
- 62) Saussure, F. de. Wade Baskin 訳 *Course in General Linguistics*. (London: Owen. 1959.)
- 63) Lévi-Strauss, C. Claire Jacobson and Brooke Grundfest Schoepf 訳 *Structural Anthropology*. (USA: Basic Books. 1963.)
- 64) Barthes, R. Annette Lavers & Colin Smith 訳 *Writing degree Zero*. (London: Jonathan Cape. 1967.)
- 65) Riffaterre, M. Thomas Sebeok 訳 *Semiotics of Poetry*. (Bloomington: Indiana University Press. 1984.)
- 66) Foucault, M. Sheridan Smith 訳 *The Archaeology of Knowledge*. (London: Tavistock Publications. 1974.)
- 67) Foucault, M. Tavistock Publications Limited 訳 *The Order of Things*. (New York: Tavistock Publications. 1974.)
- 68) Sanders, C. & Pires, M. *Writings in general linguistics/Ferdinand de Saussure*. (New York: Oxford University Press. 2006.)
- 69) 62) に同じ。
- 70) 63) に同じ。
- 71) 64) に同じ。
- 72) 65) に同じ。
- 73) 66) に同じ。
- 74) 67) に同じ。
- 75) 68) に同じ。
- 76) 62)、69) に同じ。
- 77) 63)、70) に同じ。
- 78) 64)、71) に同じ。
- 79) 65)、72) に同じ。
- 80) 66)、73) に同じ。
- 81) 67)、74) に同じ。
- 82) 68)、75) に同じ。
- 83) 相原奈津江・秋津伶訳『フェルディナン・ド・ソシュール 一般言語学第三回講義 (1910–1911) エミール・コンスタンタンによる講義記録』エディット・パルク、2003 年。
- 84) Godzich, *op.cit.* 43.
- 85) Black, *op.cit.* 35.
- 86) 磯谷孝『翻訳と文化の記号論』勁草書房、1980 年、249 頁。
- 87) Saussure, F. de. *Cours de Linguistique Générale*, (Paris: Payot, 1916), 311.
- 88) ソシュール、フェルヂナン・ド、小林英夫訳、前掲書、321 頁。
- 89) Saussure, F. de. *op.cit.* 315.



- 90) ソシユール, フェルヂナン・ド、小林英夫訳、前掲書、325 頁。
- 91) Saussure, F. de. *op.cit.* 25–33.
- 92) ソシユール, フェルヂナン・ド、小林英夫訳、前掲書、21 頁。
- 93) Saussure, F. de. *op.cit.* 25.
- 94) ソシユール, フェルヂナン・ド、小林英夫訳、前掲書、21 頁。
- 95) Saussure, F. de. *op.cit.* 26.
- 96) ソシユール, フェルヂナン・ド、小林英夫訳、前掲書、22 頁。
- 97) 丸山圭三郎「構造主義と言語学 (上)」『英語教育』1970 年 1 月号、大修館書店、1971 年、31 頁。
- 98) 末永朱胤「時枝論争とソシユールの言語概念—言語における実体と主体」『成城文藝 第 246 号』成城大学文芸学部、2018 年、40 頁。
- 99) 松中完二「ソシユール言語学と翻訳—小林英夫と時枝誠記の邂逅—」国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』第 44 号、2018<sup>a</sup> 年、37–58 頁。
- 100) 磯谷孝『翻訳と文化の記号論』勁草書房、1980 年、224–233 頁。
- 101) 松澤和宏「ラング概念の誕生とアポリア」松澤和宏編『SAUSSURE et LA SCIENCE DES TEXTES ソシユールとテキストの科学』名古屋大学大学院文学研究科、2007 年、138–142 頁。
- 102) Bouissac, P. *Saussure: a guide for the perplexed.* (London: Continuum. 2010.) (鷺尾翠訳『ソシユール超入門』講談社、2012 年、138 頁。)
- 103) 末永、前掲書、22 頁。
- 104) Mounin, G. *Saussure ou le structuraliste sans le savoir.* (Paris: Seghers. 1968), 38. (福井芳男・伊藤晃・丸山圭三郎共訳『ソシユール』大修館書店、1970 年。)
- 105) Godel, R. *Les Sources manuscrites du Cours de Linguistique Générale de F. de Saussure.* (Genève, Droz, Paris: Minard. 1957), 144.
- 106) Engler, R. 1968. *Cours de linguistique générale, Edition critique.* (Wiesbaden: Otto Harrassowitz, Wiesbaden. 1968.), 865.